



発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065
 編集 早川清志
 題字 島崎洋路

『切った木はどこへ行くのか』

通年コース第十一回報告「見学」

経済林であってもなくとも、木は大きくなり、時に手入れのためや収穫で切り倒される事があります。そしてできればそれらの木は有

効に使うてあげたいもの。まず今回は一般的な流通の経路にあたる木材市場を訪ねてみました。長野県森林組合連合会の伊那木材センター。県内に三ヶ所ある眞森連の



各極を慎重に吟味。これはスギ中玉3m柱取り、14~20cm。How much?

市場のうちの一つです。年十九回開催され、取扱量は合計で一万二千立方

前後になります。材木をさばっているのは、田口さんと柴さんの実質二人。この日も所長の大野田さんが所要のため田口さんが説明してくれました。

経営努力により年間の取扱量はそれほど変動なく推移しているものの、各種木材の立米単価はここ十年ほど、とどまることなく下がりがつづいて、ついに今年スギ三メートル

柱材は一万円を大きく割り込んでいます。一本の値段に換算すれば数百円。ヒノキにしてもその二倍強程度の値段です。植積料などのほか売上高に対しての手数料で維持されている市場としてはつらいところですね。

今回集まった山師たちもそのあたりはすっかりインプットしているシブチン揃い。わずかに斉藤林産さんがケヤキ六メートルを指値の倍以上の四十万九千円で落としたほか、和辻工務店さんとヤマ

チヨ一建築さんがほしかったクリとモミにやや高値をつけた程度でした。生産者も兼ねるY・S組は

組長自らがカラマツを相場ギリギリで落としたが「安すぎるねえ」と嘆いているあります。



なにかの試験中?かなり真剣。覗き見はいけません

とまれ、このあたりで生産された材木のかかなりの部分がこの伊那木材センターを経由し、主に建築用として製材所や工務店などに引き取られていきます。さて午後恒例になった有賀建具店さんにお邪魔し

ました。名譽塾生浜田さんご夫妻のお宅の家具、建具一式を製作されたり、今は成田さんご夫妻の家具なども手がけられるなど、森林塾関係者と縁の深いところですね。親方の恵一さん、古株の小島さん始め総勢七人。昨年の塾生、菅さんも技術専門校を卒業され今年からお勤めです。

親方の方針の一つは安い材料をふんだんに使う、と言う事、浜田宅で見せてもらったタモの無垢のテーブルの立派な事とその値段の安さにはびっくりした覚えがあります。お宅の改装をお考えのあなた、一度親方に相談されたいかがですか。

また、基本的にはどんな曲がり材でも端材でも何らかの使い道はあると言うことですから山の手入れを手がける者としては嬉しい話です。

小島さんのお話も色々参考になるものでした。机の高さは身長の一パーセント、机は二六パーセント、でも何人かで使うときは低い人にあわせて使うのが使いやすいと言うお話。また、一メートルの一枚板が、時に一センチくらい動くと言うお話。おどろきです。

木や板や色々な道具や機械



所長が南信木材センターと兼務のためここは実質田口さんと柴さんの二人で切り盛り

に囲まれて、しかもお茶やお菓子をこ馳走になりすつかりくつろいでしまった面々。帰りには板見本の切れ端もお土産につき、すつかり満足でした。

お忙しい中、丁寧にお相手してくださった伊那木材センターの田口さんと柴さん、そして有賀建具店の親方、小島さんほかの皆様、どうもありがとうございました。

通年コース 第十一回 見学

9月7日(土)

8時30分 島崎先生の山小屋に集合。日程説明。先生の木材市況の現況説明の後、分乗して長野県森林組合連合会の伊那木材センターへ

9時30分 伊那木材センター着。業務内容の説明と最近の伊那木材セン



鬼頭さんの駄洒落に親方話の腰を折られるの図



一枚板の無垢テーブルは素材(の良し悪し)だけなので作る側としては欲求不満が残ります」と小島さん



板や機械に囲まれてお茶。すっかりくつろぐの図

12時 大芝高原に向かう
12時30分 大芝高原にて昼食

ター市売り状況の説明を受ける
11時 模擬入札開始。森林塾入札用にあらかじめ用意して頂いた十種類の樹の下見と説明を聞いてから一番から順に入札。本場の市売り当日は三百種以上を一時間程度でこなし入札はゆっくりとやっていただいた。それでも相対に忙しい。もともと本番では欲しいものだけに札を入れるだけなのだ。最近の厳しい木材取引を反映してか(?)ほぼ市況単価に近い落札が相次ぐ中、どうしても落札したいという買い手の意気込みを感じさせる入札も二・三見受けられた

参加者/井上さん、江尻さん、尾形さん、長部さん、梶原さん、北澤さん、鬼頭

13時30分 有賀建具店着。テーブルを作る時の天板のはぎ方や高さの決め方の説明を受ける。ティータムをはさんで、約七十種類の木のサンブルを見せて頂きながらその特徴を教わる。このサンブル作成時に出た端材をお土産に分けて頂くことになり、希望者が殺到。最後に積積み乾燥の板材を見せて頂いた。たくさんの材料がうず高く積みまわって待っている。樹種等により五年以上寝かして置かれる板もあるという話は尽きないけれどここで見学終了

10月4日(金)5日(土) 歩道を作ります。また八日間になりそうです。

次回以降の予定
9月21日(土) 第十二回「枝打ち」
8時30分島崎先生の山小屋に集合。ぜひ枝打ちの5W1Hを持ち帰っていただいたいと思います。また、ぶり縄による木登りにも挑戦してみましよう。保科先生の担当
第十三・十四回「測量・製図」および「林道設計」

植番	樹種	長さ(m)	末口(cm)	本数	材積	落札者	落札単価(m³)	市況単価(m³)
1	ヒノキ	3.00	16~18	24	2.128	和辻工務店	30,000	26,900
2	クリ	4.00	22~26	5	1.118	和辻工務店	80,000	38,000
3	ヒノキ	3.00	22	1	0.145	まるは建材	55,000	60,000
4	スギ	4.00	32~38	3	1.566	成田木工	21,800	20,000前後
5	アカマツ	4.00	40	1	0.640	斉藤林産	24,300	25,000~30,000
6	アカマツ	4.00	22~26	8	1.812	山下経木店	18,800	14,000~16,000
7	モミ	4.00	32~36	3	1.390	ヤマチョー建築	35,000	16,100
8	スギ	3.00	14~20	56	4.492	山田屋木材	10,000	7,500
9	ケヤキ	6.00	52	1	1.685	斉藤林産	409,000	90,000
10	カラマツ	4.00	20~22	6	1.028	ワイエス組	13,000	12,000



猛烈に暑かった今年の夏も乗り越えて、わが森林塾通年コースも半ばを過ぎました。今、落ち着いて自分自身を顧みてみると、五月の第一回以来六回、十日間の講義と実習、その前後での参加者各位との語らいなど、森林塾のすべてがあまりにも自然で、違和感なくすんなり自分の中へ入ってきているのに驚かされます。そもそも初日の皆さんの自己紹介からして、聞いていて驚くと同時に安心し、嬉しくなっていましたね。だって世の中の常識から見れば、相当な辺境とも言える世界(失礼ながら林業の事です)に、老若男女様々な人たちが集まってきていること、しかもそれぞれが独自の暮らしともの考え方を持っていて、そこからこく自然に林業、森林塾というアプローチ

をしてる事がわかったからです。その独自のものと言ったのがまた相当辺境っぽいものばかり(失礼!)だったのが嬉しかったですね。かく言う私も相当変な人と見られて入るようですが、本人は至ってフツーでちつとも変でないと思っっています。何故って、ここに到る道がきわめて自然で、これまでのコトの推移には、清水の舞台のような所は全くなく、まるで予定された道を往くように坦々と事態が進行してきたからなのです。そこで自己紹介代わりに、どのような過程を経てここ伊那へ辿り着いたかの十年間を振り返ってみたいと思います。

十年前
人生五十にして立つ
私は一九四一年八月生まれです。今年六十一才になります。十年前、五十才になって人生の半ばに立ったと気がついた時、流石に考えましたね。会社での先は見えず、やりたいことは山のようにあるし、オヤジを亡くしたこともあって、これが人生の転機という奴かと気がつき、それまでのおとなしい生き方から、したいことは遠慮せずにするという普通の生き方に転じたわけです。ヒゲを生やしたりオープンカーを買ったり、妙なこともしましたが、一番マジメにやったことは身



命圏・ガイアの科学、ガイアの時代、ともに(工作舎)もあります。仮説というものは、その説によって現実の事象がどれだけ矛盾なく説明できるかにより検証され

体能力開発のための運動で、ジャンプ体操、ヨガ体操、気こう体操など、自己流体操を考へ実践してきた事です。このうちジャンプ体操は先日十年間累計五百二十万回を記録、その結果心肺機能や持久力などは今でも十八才以下をキープしています(継続は力なり!)。また例のホンダビートも、現在まで九年半で八万四千キロを走破(平均燃費十六・四二キロノリットル、記録は力なり!!)、生活の行動半径も広がり、それが伊那まで繋がっている訳です。それまで気にはなっていたけれど、とりあえず脇へ置いておいた分野に関して、精力的に読書を始めました。生きることに關してはヒルティ、中村天風、中野孝次などなど、仏教に關しては紀野一義や梅原猛を手当たり次第読み漁りましたが、主に知りたいう欲求だけで、のめり込むまでは行きませんでした。

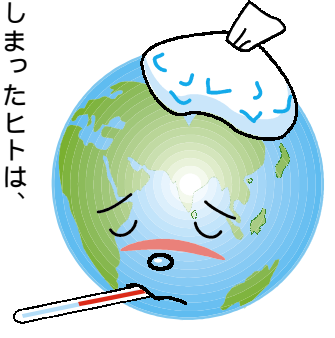
七年前 生命・地球への目覚め
こんな大事な映画を誰が勧めてくれたのか。この年「ガイアシンフォニー」を見ました。常人とはかけ離れた状況を経験した人や、並外れた能力を示す人たちをインタビュするオムニバス映画で、現在までに第四番まで完成、自主上映の形で見る事ができます。この中で、製作者、龍村仁さんの言いたいことは、この地球に満ち溢れる生命の存在、それらがすべて連なっている生命系であること、地球そのものがある意思を持った生命体ではないかという仮説なんだと理解しました。そして、その生命系の一部に過ぎないヒト・人間の、自然・地球すなわち生命系に対する思い上がった愚行を静かに告発する言葉もあるように思っています。
地球生命体・ガイア仮説は、もう二十年以上も前に、英国のラブロック博士がNASAの火星生命探検計画に参画中に得た仮説で、著作の和訳(地球生命圏・ガイアの科学、ガイアの時代、ともに(工作舎)もあります。仮説というものは、その説によって現実の事象がどれだけ矛盾なく説明できるかにより検証され

て行く訳ですが、四十六億年の時を経て、今我々が存在している事の不思議さを説明できる説としては、地球ガイア説は大変に心を惹かれるものがあります。とにかくこれにより、生命という根源的課題に目を開かされる事になりました。
四年前
なむあみだぶつ・仏教への目覚め
正月、机の脇に積んで置いた「仏教の思想」全十二巻(角川ソフィア文庫)に手をつけました。この全集は、もう三十年以上前に梅原猛をコーディネートに、インドから中国、そして日本で究極的な発展をした仏教の説すべてを網羅、解説したもので、中味の理解は別としてとにかく読み通すだけで丸二年かかりました。
キリスト教やイスラム教など一神教の教えには、唯一自らの神のみを崇め、異教徒は殺せと要約できるような排他的な所が強いのに對して、仏教の懐の広さ、すべてを受け入れてしまう鷹揚さ、いい加減さに安心できるものを感じました。西欧合理主義の原点には、この排他性が色濃くあり、それを是とした今日の文明の行きつまりを何とかするために仏教、特に日本仏教の役割は大きいと考えられます。

生命ということを考える時、必然的にその終わり、死というところに行き当たります。我々が小学校以来、学校という所で教え込まれたことは、わからないこと・説明できないこと・合理的でないこととは存在しないということだったと思います。要するにわからないことは無視してもよいという切捨て思考です。その不可触事項の最大のものは「死」だったのでないでしょうか。
渡来以来千四百年、我々日本人の先達たちは仏教にどう取り組み、特に死についてどう考えてきたか、また渡来以前から原日本人にあった多神信仰(何しろ八百万も神々がいる!)や、あの世・輪廻転生にも興味があつて、シャーリー・マクレーンの心霊体験まで読みましたよ。
一年前
さあ樵だ!
いよいよ林業の勉強を始めました。これまでの流れの極めて自然な帰結として、退職後三十年の人生、あと半分の人生は、山に入って林業をするしかないと考えたからです。

塩ノ谷先生の「木炭自動車」を両極端として、九大堀先生の「山村の保続と森林・林業」、京大四手井先生の「森に学ぶ」他、名大只木先生の「森林環境科学」などが記憶に残っています。しかしその中であつて、林業の全体像、現状と問題点、解決への道など、すべてに亘つて明確で説得力のあつたのは「山造り承ります」だったので。これはもう行くっきゃない!!
今、そしてこれから
私は三十六年間エネルギー会社におりましたので、将来のエネルギー・食糧事情などについては多少の知見もありません。今でさえ世界全人口の半分近くは飢餓状態にあり、石油はあと三十年、石炭や天然ガスでも百年くらいと言われる有限な化石燃料などのエネルギーを、これから数十年で百億人になる人間どもが取り合つたらどうなるか、正に火を見るより明らかです。その事実にもあえて目をつぶり、便利で快適な文化的生活を追い求める先進国の普通の人の行ないの結果として、温暖化を始めとする全世界規模の危機的状況(の前兆)が引き起こされていると言えるでしょう。

この地球で、今起きていること、生命系そのものである地球で我々ヒト族が引き起こしていることの本質を知ってしまったヒトは、これからどう生きるべきなのでしょう。これまで無意識のうちに刷り込まれてきた理想の暮らし、便利で楽でコギレイなWay of Life、ひとで言えば都市型生活の幻想からまず離れることが第一歩でしょう。都市型生活とは他者依存の生活です。生きるに必要なInputからOutputまで、すべてを他人任せにする極めて不安定な生き方です。これからはできるだけ都市を離れた暮らしを考えるべきでしょう。化石燃料を使わず(太陽熱と薪ストーブ)食料は自前で栽培(主食、野菜)、不必要な情報(ほとんどが都市生活用)から離れた「田舎」の暮らしが二十世紀的なWay of Lifeの理想形の一つとなるのではないのでしょうか。
と、ここまできて八々と気がついたら、私もカミさんにも、不幸なことに田舎といえるものがあります。どうやら、これから生まれそうな孫のために、田舎となるべき拠点を何とか開拓して、山の



木の面倒を見ながら、死ぬまで現役でいたい、などという夢を見ている近頃です。土地や山を私有したいなどと言う不埒な考えはありませんので、どこか(できれば伊那の近くで!)それほど広くない山と古い家、更にもう一つ我儘を言わせてもらえば、山仕事の弟子入りを許して下さい。師匠が近くにおられるような、そんな拠点を貸して下さい。奇特な方を、どなたかご存知ありませんか!?



こんにちは、大工の坪内です。昭和三十八年十一月十五日生まれ三十八才。大工を始めて十二年目です。昨年四月に東京よりこの伊那谷の中川村と言う所へ引越してきました。中川村には、かあちゃんの実家があり、そこで母親が一人暮らし



をしていますが。現在はまだ一緒に暮らしていませんので

が、いま作業場兼自宅を建設中で、完成したおりには一緒に住むことにしています。頑張っています。近所の人からは「いつ建つ?」と言われるんですが...

最初にKOA森林塾に出会った経緯を話します。東京にいた頃、埼玉の朝霞市と言う所に「はっかり木材」という材木屋さんがあり、そこをベースに「大工塾」という集まりがありました。私はその中で島崎先生の講義を受け、二年目の時に伊那で実際に木を倒すということ、大工塾の皆で体験したのが初めての一步でした。そんなとき「山造り承ります」という、あの山小屋の囲炉裏のあたりに「愉快な山仕事」というチラシがあり、そのチラシを見て、まず浜田さんの「愉快な山仕事」に参加しました。仕事柄、大工なので材木を毎日

手にしています。山の立木についてはほとんど知らないというところに気がされました。大工なのにと恥ずかしく感じました。そしてまた、日本の山はこんなにやばいんだということも自分の中に入ってきました。そこで自分ができることで何か始めていかなければいけないと思つたのが参加した感想でした。

かあちゃんの実家・中川村に山があることを聞いていたので見に行くことにしました。隣の境界がどこか最初わかりませんでした。後でわかったのですが、間違つて隣の山を自分の山だと思つていました。木を切らなくてよかったです。森林塾でスタッフをされている川島さんに愉快な山仕事の時に会つていましたので、山をどのようにしたらいかが二回ほど見てもらうことにしました。我家の山は北側の斜面で、植林された山というよりは自然のままの山で、赤松が主で栗・桜・ミズナラなどの広葉樹があり、その中にいくらか植林した松が(まだ直径が十二センチくらい)まばらにあるという状態の山でした。これから少しづつ山に手を入れて楽しむにはいい山ですよと川島さんに言っていたとき、森林塾

で学んだことがまず自分の山そして周りの山にと広がるようにと楽しみにしています。二回目に川島さんと会つた時に自然にKOA森林塾の話がでてきて、まだ募集定員に達していないとのことだったので参加を決めることにしました。

自分の大工の屋号を「あゆみ大工」と言っています。普通は「工務店とか××建設」といった感じで、こういう屋号で大工をしている人は少ないかもしれません。あえて大工という言葉を使ったかったというところ、「あゆみ」については我家のルーツが歩くことにとても縁があり、かあちゃんとの出会いも「歩く会」で出会つたことがスタートだったのです。現在子供が四人います。四人の子供の名前には歩という字を全員に使っています。一番上の小学校六年の娘は「佐歩」、二番目の小学校四年(男)は「一歩」、三番目の小学校二年(男)は「周歩」、四番目は保育園の年中組(男)で「歩(アユム)」、というようなことで屋号を「あゆみ」とつけました。この名前を聞いていい名前だよと言っていただけの人もいて、今は、ずっとこの屋号でいいかなと思つています。これから「あゆみ大工」をよろしくお願いします。

は...木の良さがわかってもらえる家づくりです。地元の家、近くの山の木、自分の家の庭にある木でもいいのです。また、昔住んでいた家の古い梁とか桁など無垢の木を見直し、木にこだわればそのことが山造りにも影響が出るのではと感じています。この伊那谷でも落葉松を主に用いた家づくりを進めるグループが起きています。少しづつではありますが山へ目が向くような行動を私も起こしていきたいと思つてます。

最後になりましたが、冒頭でも話しました作業場兼自宅を年内にはある程度のカタチにして住める所までもつていけたらと頑張っていますので、ぜひ遊びに来て下さい。これからもちよつと変わった大工をよろしく願っています。

コラム

先日家人がますみが丘で炭を買ってきました。ほとんど趣味で焼いている、といった感じで、広葉樹の炭が中心ながら十キロ六百元という値段(安い)。

いろいろ楽しい炭焼き話も聞くことができたようで、ここにこして帰ってきて七輪に向かっています。おまけだといって直径十一センチ、長さ三十センチくらいのヒノキの丸太炭をもらってき

たので、思いついてブラシでゴシゴシ洗って湯船にプカんと浮かべてみました。夜、お湯につかりながら年輪を数えてみると十七年ほど。そして「ジミジミ、プチプチ」と、盛んに何か言っている。お米に入れて炊く炭のフィルムケースほどの大きさはおなじみですが、それと形が似たこの大きな炭といっしょにお風呂に入ると「リカちゃん人形」になつておなべに入っているみたいない気分(リカちゃんよりはいいぶん太めだけれど)。

おわりに

暑かつた夏も終わり、秋の始めはアンニュイでメランコリー(なんのこっちゃ)。なんて気分になつてる暇があれば山に入つて一仕事。お土産は各種きのこ栗やアケビやサルナシ、山葡萄。忙しい季節です。

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。
TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994
E-mail: ki-hayakawa@koanet.co.jp
sh-sakano@koanet.co.jp
mi-tsuboki@koanet.co.jp
携帯:0902-53-26375(開催日)
H.P.http://www.koanet.co.jp

